淡青

「淡青」について

東京大学と京都大学（当時は東京帝国大学、京都帝国大学）が1920年に最初の対抗レガッタを瀬田川で行った際、抽選によって決まった色が「淡青（ライト・ブルー）」であり、本学の運動会をはじめスクール・カラーとして親しまれてきました。

『淡青』4号をお届けします。本号の総長対談は、本学大学院を修了し、現在は駐日大韓民国大使としてご活躍されている崔相龍氏をゲストにお迎えいたしました。新しい世紀にはいり、アジアというキーワードのもつ意味がますます重要性を増すなか、アジアの知を世界に向けて発信する意義について、蓮實重彦総長と存分に語っていただきました。

特集は「社会の中の東京大学」です。本学が行っている、社会と向き合うさまざまな活動の一端を紹介する企画です。その対象は地域、世界、産業界、次世代とさまざまですし、環境創造という視点からの試みもとりあげました。さらに、ユニークな活動をなさっている3名の卒業生に、それぞれの体験に基づき本学をどうみておられるかをインタビューいたしました。

「教育・研究の現場から」では、附属図書館と大学院工学系研究科・工学部の紹介、「世界の中の東京大学」では、インドネシア・ボゴールの海外拠点の紹介、そして「サイエンスへの招待」では生産技術研究所の榊裕之教授に登場いただきました。「キャンパス散歩」では、本学の講堂をとりあげています。

創刊号を発刊して以来、学内外の多くの皆様からご意見や励ましの言葉をいただき、内容を徐々に充実させることができたと感謝しております。次号からは新しい編集スタッフに引き継がれますが、皆様のさらなるご支援・ご協力をよろしくお願い申しあげます。

（東京大学広報委員長　大塚柳太郎）

総長対談

アジアからのメッセージ

ゲスト

崔　相龍

駐日大韓民国大使

韓国、日本をはじめとするアジアの知識人が連帯して、その潜在能力を発揮すれば、発信されるメッセージは非常に大きい。崔相龍駐日大韓民国大使をお迎えして語っていただく、新しい世紀の課題、アジア的な知性の協力とは。

崔　相龍
Choi Sang-yong

一九六四年、ソウル大学校文理科大学外交学科卒業。
一九七二年、東京大学から法学博士の学位を取得後、ハーヴァード大学客員教授、高麗大学校政経大学教授・亜細亜問題研究所長を歴任。この間、韓国政治学会会長、韓国平和学会会長、韓日文化交流委員会副委員長を務め、二〇〇〇年より在日本国大韓民国特命全権大使。

蓮實重彦
Shigehiko Hasumi

一九六〇年、東京大学文学部卒業。留学したパリ大大学院人文科学研究科に進むとともに、一九六五年にPhDを授与される。帰国後、立教大学から一九六五年にPhDを授与される。帰国後、立教大学を経て一九七〇年から本学教養学部、一九九三年、教養学部長。一九九五年、東京大学副学長。一九九七年、東京大学総長。

蓮實　本日はお忙しいところをお越しいただき、ありがとうございます。

東京大学で博士号をとられた方が韓国大使としてご着任されたことは、私にとって大変な名誉で、日韓両国にとって素晴らしいことです。ところで、崔大使が東京大学にいらしたのはいつごろだったのでしょうか。

崔　一九六五年から一九七二年の九月までおりました。たしか、一九六六年三月から外国人研究生として半年ぐらい受験勉強をし、その年の九月に国際政治学を専攻する修士課程にはいりました。当時の主任教授は坂本義和先生でした。その後、博士課程に進み、一九七二年七月に法学博士号をいただきました。今度、大使として日本に赴任してから確認した話ですけれども、東京大学で国際政治学分野の博士としてははじめてだったそうです。

蓮實　政治学を専攻なさったのは、どういうきっかけですか。

崔　私は一九四二年の生まれですが、四歳くらいからのことを覚えています。世界的な規模での冷戦は、一九四七年三月のトルーマン・ドクトリンからはじまったのですが、その前から韓半島では厳しい冷戦がはじまっていました。私は慶州の生まれです。私の村では、夜はパルチザンの青年たちが革命歌を歌う一方、昼は警察がきて共産党を示す「共匪」を鎮圧していました。人が殺されたこともあり、村は本当に血だらけでした。その記憶は非常に強烈でした。植民地、占領、分断、左右の戦い、これらが慶州での小学生から高校生までの体験でした。

ソウル大学にはいったのが、四・一九学生革命の年です。私は学生のデモに加わり、そのグループのメンバーとして活動しました。幼いときの体験、大げさに言えば冷戦体験といいますか、それが大きかったのです。ソウル大学の学生になってからは、左右の対立や分断の原因を探り、それをどう解決したらいいか、実践的な問題意識をもつようになりました。

現代史では、大韓民国は一九四八年八月からはじまるとなっていますが、その前の一九四五年から一九四八年の占領期間は歴史の空白期で、教科書にも載っていませんでした。日本は当時マッカーサーの占領下です。私が学生のころの韓国の政治の悲劇を理解するには、分断の原因、分断直後の占領政治を探らなければなりません。その悲劇をどう説明し、どう解決したらいいかという問題意識からです。そのためには、アメリカ留学はあまり適当ではありませんでした。一九六〇年代も、アメリカにはマッカーシズムの後遺症みたいなものが、少なくとも知的な雰囲気としてあったからです。日本は同じ占領期を経験しているから、占領体制の比較研究もできるので留学先として最適だと考えました。

蓮實　戦後、日本はアメリカのデモクラシーを輸入しました。しかし、すでに一九四八年以前からマッカーシズムがアメリカ社会を深刻な危機に陥し入れていたという負の局面は、当時の日本ではあまり話題になっておりませんでした。大使はそれを敏感にお感じになっていたのですか。

崔　そう思います。私は、アメリカによる日本の占領は、占領政策の成功例にはいると考えています。外圧ともいえるわけですが、外圧と民主主義

懐徳館にて

は共存できるのです。ところが、韓国は外圧によって分断され植民地になった。その後の三年間、「占領民主主義」の洗礼をも受けなかったのです。占領軍にはまったく準備がなく、三年間を場あたり的な方針でとおしました。この三年間に、左右の対立が非常に厳しくなったのです。

占領政策が日本とおなじようなものでしたら、その後の韓国の民主化や議会民主主義にとって、建設的な土台になったと思っています。そうでなかった韓国の占領は、占領政策の失敗例なのです。それで、私は一九七九年から二年間、ハーヴァード大学に留学し、マッカーサーの日本占領とホッジの韓国占領の比較を研究テーマにしました。

蓮實　戦後の日本の指導者には戦前の官僚が多いわけです。吉田首相は元外務官僚です。戦前の官僚組織のなかから日本の戦後の政治家たちがでてきたことを、大使はどう思われますか。

崔　これはあくまで一研究者としての見解ですが、天皇制官僚の連続性が日本の自立的な民主化の障害になったと思います。

蓮實　日本国民は、そのような矛盾を自らの手で解消しなかった。たとえば、岸信介のような政治家が戦後も生き延びられ首相にさえなったような、融通無碍というか、そういう矛盾を残しながらも、大使はなお占領政策は成功だったとお考えになりますか。

崔　はい。ともうしますのも、明治以降の日本の歴史を振り返ると、日本国民自らが民主主義を奪い取ったことはなかったと思うからです。明治維新も revolution ではなくて restoration ですね。日本流の対応の仕方なのです。見方によって評価は変わりますが、戦後の改革もその延長線で外圧によるものでした。しかし、その中身は質がよかったのではないかと思っています。占領と民主主義の共存という意味で、私は相対的に成功だったと判断しています。

三〇パーセントのエリート

蓮實　大使が東大ご在学のころは、丸山眞男先生をはじめとして、戦後民主主義の担い手が多くいらした時代ですね。こうした方々を見て、大使は何かそこに矛盾をお感じになりませんでしたか。

崔　これは印象でしかありませんが、一九六五年以来の約三五年間、あらゆる分野のリーダーや市民と交流を深め、その結果、日本の市民のなかには、おおざっぱにいえば三〇パーセントくらいのインテリがいると感じるようになりました。そのインテリの世界に限ってみれば、本当に多様性にあふれた国だと思います。コスモポリタンもいれば、天皇制批判者もいれば、コミュニストもいる。ディレッタントもいる。とくにわれわれとの関係でいうと、歴史認識の面では韓国人以上に厳しいというか、日本の保守基調にきわめて批判的な人もいます。

その一方で、残りの七〇パーセントが非常に日本的だと私は思います。どちらかというと、丸山先生もやはり三〇パーセントのなかの一人ではなかったでしょうか。日本のメイン・ストリームは、良かれ悪しかれ保守基調で、日本の伝統を守ろうとし国家を中心に物事を考えます。丸山先生は、西洋の概念で日本を解釈し説明したのですけれども、やはり限界がある。おそらく先生も、後期にはその限界を自覚されたのではないでしょうか。

蓮實　なるほど。私も丸山先生に対してある意味ではアンビヴァレントです。先生がおっしゃることは正しいとしても、それで日本が本当に変わるのだろうかという感じをもっておりました。

ところで、東大では、その三〇パーセントのエリートをつくればいい、七〇パーセントを動かそうとするよりは、七〇パーセントからむしろ超然と離れていたほうがいい、という考えが長く力をもっていたように思います。かつては象牙の塔といわれておりましたが、そこにこもって三〇パーセントを相手にいい仕事をしていればいいという考えです。しかし、この考えにしたがいますと、現実には、象牙の塔のなかで進歩があるだけで、それを日本全体に及ぼすことはできない。いま、東大は三〇パーセントのなかに自足せず、残りの七〇パーセントにもいろいろと発信していかなければなりません。

崔　一三〇年近い歴史のなかで、東大は多様なリーダーを輩出したのではないでしょうか。三〇パーセントの人びともいますけれども、七〇パーセントのなかに優秀な官僚や企業で活躍する人材がいます。私が東大にいたときには、会社の役員の七〇パーセントが東大の出身者でした。出身学部は経済学部よりも、むしろ法学部が多かったと思います。その意味で、いままで東大は広い意味でのリーダー、日本をリードする層を生産してきたと思います。

日本の知識人への期待

崔　私は、日本の知識人に対して強い期待をもっています。平均的な西洋の知識人による東洋、アジアの無視が怖いからです。アジアにかんする数少ない専門家は優れていますが、彼らは例外です。平均的な西洋の国民、市民だけでなく、知識人にも東洋についての教養は少なすぎます。

蓮實　それはおっしゃるとおりですね。

崔　それに比べると、日本の平均的な国民、市民、知識人の西洋についての教養は優れています。幼稚園から大学院まで西洋のことを学びます。これは力です。ただし、東洋と西洋のバランスがとれた知識、教養が本物だと思います。それを一番備えているのが日本の国民です。韓国の国民もそのなかにはいるかもしれません。

総長がお考えになっている、日本・韓国・中国の知識人でつくる「ゴールデン・トライアングル」構想は、この三つの国の知識人の使命、役割に還元すると思います。そのなかで、まず日本が東アジア再認識の知的な主体になってほしい。荒っぽい表現ですけれども、民主主義と市場経済、それから東洋の教養をもっている知識人は日本人と韓国人です。両国の知識人が連帯して、その潜在能力を発揮すれば、発信されるメッセージは非常に大きいと思います。

蓮實　私もまったく同感です。今までも日本人が韓国を研究する、韓国人が日本を研究することはあったのですが、もう一つ新しい視点として、日本人と韓国人が力を合わせてヨーロッパ、アメリカを見ることも必要だと思います。相互理解はお互いを学びあうだけでなく、第三者を見る目からもつくりだされると思っており、そのために私はいくつかの企画を行ってまいりました。

中国でも、だいたい三五歳ぐらいまでの若い人たちは自由にものを考えていますが、まだそれが公式の声になっていない。中国に潜在力のある人たちがいることはまちがいないので、韓国と日本と中国の潜在的な力をもった人たちが集まれば、大きな学術的な力が生まれると思うのです。

崔　たとえば、東アジアに住む私たちが慣れ親しんできた、人間関係や政治関係にかかわる規範の一つに「中庸」があります。これは非常に独創的な考え方ではないでしょうか。日本人は「中庸」に慣れ、これを空気のように思う雰囲気がありますが、「中庸」はたんなる真ん中ではなく、非常に意識的で自覚的でダイナミックな規範だと思います。

蓮實　何かを生み出していくものなのですね。

崔　そうです。孔子の「時中」は素晴らしい言葉です。「中庸」すなわち「時中」です。この「時」はたんなるタイムではなくて、要するにコンディションです。いろいろな状況、条件によって「中」の意味がちがうという意味での「時中」なのです。

これと同じことをアリストテレスは、“mean related to us”と言いました。この us は当時の都市国家の市民です。mean はたんなる mean では

なくて、人間関係にかかわっています。その人間関係によって、meanの意味がちがう。それは中庸のダイナミズムそのものです。非常に動的な均衡ですね。国境、歴史を越えて、人類が体験、実践によって積み重ねてきた一つの規範でありゴールデン・ルール（黄金律）です。

これは一つの例ですけれども、このように東洋と西洋の思想を比較し分析する能力のある知識人が、地球上のどこにいるかというと、繰り返しになりますが日本と韓国です。中国にもいずれでてくるはずです。西洋の知識人が見逃している面を普遍的な視点から研究し、その成果を世界に向けて発信する、そのイニシアチブを日本の知識人がとってほしい。そうすれば、韓国の知識人も中国の知識人もかならず応援にきます。

蓮實　世界に向けた視点をもった人たちが集まるということですね。ただ、現在のような世界の知的状況をつくりだしたのは、日本人も韓国人も含むアジア人が、知的に怠慢であったからではないでしょうか。

崔　おっしゃるとおりです。怠慢か、あるいは鋭い問題意識がなかった。十分な知識をもっていながらも、どういう形でメッセージを送るかという問題意識の欠如もあったと思います。

蓮實　これからは、いいことを考えているだけでは駄目で、それをどのようなメッセージとして世界に発信するかという戦略が大事ですね。

過去の記憶と生産的な未来

蓮實　たとえば二一世紀のことを考えるときに、日本ではしばしば二〇世紀に日本が犯してきたいくつかの問題を記憶から遠ざけようとする傾向があります。さらには、過去を捏造しようとする動きさえあります。このようなことは日本だけではなく、たとえば第二次世界大戦後のフランスにもみられました。また、一九四〇年代の終わりから一九五〇年代にかけて、アメリカが自分自身の国の知識人をどのようにひどく扱ったかにかんする記憶が、現在のアメリカ人にはないのです。

このように、過去を記憶から遠ざけることによって得られる現在の豊かさは、空疎でかならずつぶれると思うのです。ですから、大学は過去を記憶にとどめることが必要です。しかし、記憶そのものを絶対的な条件にすると、一億総懺悔というまったくつまらないことになってしまいます。記憶をとどめつつ、その記憶をいわば痛みとして感じ、それによって過去だけでなく将来の視点をつくることが大事だと思うのです。

崔　いま、韓国と日本は国交を正常化して三五年目ですけれども、とくに二年半前の大統領訪日以来、雰囲気が非常によくなりました。何がよくなったかといえば、友人になれたことです。過去を直視し、歴史認識を共有したうえで未来を志向することを、両首脳が文書で約束したのです。

過去を清算する話も耳にしますが、清算という言葉は、私の歴史観からつかいにくいのです。歴史において、言葉の真の意味での清算ということはあり得ません。戦争と革命さえ、過去の歴史を清算できなかったのです。歴史は、変化と連続の限りない相互作用です。しかし、けじめや区切りをつけ未来に向かっていこう、という考え方はよいと思います。

蓮實　生産的な未来をつくるためにですね。

崔　そうです。過去は未来の鑑です。これは日本国内の問題ですからなかなか言いづらいのですが、教科書の問題が依然として心配されます。過去を直視するとした、二年半前の約束は守ってほしい。それが守られないと、友好関係の障害になる可能性があります。

蓮實　未来をつくるのに設計図をまちがえてはいけない、ということですね。

崔　そのとおりです。私はいろいろな機会に、ランケの「歴史は書き替えができない。その意味では一つの神に通じる」という言葉を引用します。歴史は一つの神である、歴史は砂の上に書いた文字ではない、そう容易に消せない、ということです。でも、過去は消せないのだけれども、われわれはよい未来をつくることはできます。確認された歴史的な事実を曲げたり、消したり、なくすことは、両国の友好のために、また日本のためにもよくない、もっと真摯に考えるべきなのです。

蓮實　過去を抹殺することは、韓国をはじめとするアジアの近隣諸国に失礼であるという姿勢もあるのですが、それ以前に人間として最低限のモラルの不在を意味していると思います。そこにさらに偏見がはいってきますと、つくりあげるべき未来の設計図が足元から崩れる。そうすると、だれの得にもならないのですね。

崔　「ゴールデン・トライアングル」を創造するには、隣国からの信頼、友情がないとむずかしいと思います。

文化交流と相互理解

崔　二年前、韓国が日本文化に門戸を開いたのは一つの決断でした。文化はたんなる文化ではなくて、経済力をともなっています。日本の文化産業は競争力に優れ、韓国のそれとは比べものになりません。こういう状態で韓国の市場を開くと、かならず損をするという認識から、九〇パーセント以上の人びとが反対でした。でも、大統領は「いや、開こう」と決断しました。

学者は政治の決断の後にそれを意味づけることが多いのですが、私の意味づけは、文化というものは行ったり来たりしながら学びあうプロセスであり、限りない相互学習の過程である、というものです。たとえば、朱子学の面で李退渓（りたいけい）の思想が、山崎闇斎（あんさい）に大きな影響を与えました。江戸時代の初期までは、むしろ韓国が影響を与える立場にあったといえます。その後、われわれは近代化、産業化について日本から学びました。文化とはこういうものです。ある特定の時点における優劣の問題ではなく、長い歴史のなかで広い視野から学び合う過程なのです。

幸いに、日本の映画『ラブレター』に一〇〇万人以上の韓国国民があつまり、韓国のアクション映画『シュリ』を日本の多くの若者が見ました。こういう若者に希望があるのです。おもしろければ文化は国境を越えますし、本当にお互いに学びあえます。

蓮實　金大中大統領のご英断は、非常に素晴らしいものです。

ところで、外圧ということに関係して、サッカーのワールドカップを日韓両国が共同開催することを決定したことが印象的です。日本は自分たちだけで主催するつもりでいたのですが、国際サッカー連盟が一緒にやりなさいと言った。そうすると、それまでは絶対に自分たちでやろうと思っていた日本のサッカー連盟がくるりと変わったのです。第二次世界大戦後、日本の官僚たちがくるりと変わったのと同じことが起こったような気がしました。現在の日韓関係の良好さの背景の一つには、外圧があったと考えています。

崔　いい外圧はいいのではないですか。外圧はすべて悪いのではなく、歴史のうえでは外圧と自立が矛盾しないときもあります。

蓮實　私はサッカーが大好きだし、私の一番好きなサッカー選手は韓国にいるのですけれども、やはりこれからは知的な面での協力を推し進めなければなりません。私は可能なことからはじめるつもりです。東大には、今までは文学部（大学院人文社会系研究科）に朝鮮文化部門という研究施設があっただけなのですが、できれば韓国・朝鮮文化を研究する大学院の組織をつくりたい。それに、学部の一年生のときから習う韓国語の教官の数は、来年度からまちがいなく増えると思います。

崔　人文系の研究組織についてですが、韓国の現在のダイナミズムを知るには、やはり政治と経済の研究をともなわないと駄目です。それは制度的にむずかしいのでしょうか。

蓮實　むずかしくはありませんが、多くの部局に散在している韓国の経済や政治の研究者の組織を、すぐに制度化できるかどうかはわかりません。私は韓国だけときめないで、むしろ中国などを含めたアジア研究という枠組みがつくれればいいと思っています。

崔　研究組織だけではなく、学生が集まる教育組織も将来考えられますか。

蓮實　それは当然考えています。どのような形で実現できるかは、あと数年お待ちいただきたいと思います。

崔　ところで、あらゆる分野で日本の研究者の業績は英語に訳されているわけではないでしょう。もし英語に訳されれば、世界における日本の知識人に対する評価は非常に高くなるのではないでしょうか。西洋人は、とくに歴史・政治・経済などの分野での日本人の研究をほとんど知らないのですから、本当にもったいないです。

もう一つ、日本では政界とか財界の人びとが、知識人をあまり評価していないように思います。私は政界や財界のリーダーと会う機会も多いのですが、知識人を優待して高く評価すべきであると訴えてまいりました。政治と学問の距離が、あまりに遠すぎたことと関係がありそうです。

蓮實　いろいろとおっしゃっていただいたことを、私は着実に一つずつ解決していきたいと思います。東大では重大な変革を行うのに一〇年かかるといわれています。しかし、それはいくら何でもかかり過ぎなので、私は数年で変えたいと願っています。

崔　決定が下される過程をみますと、韓国は早すぎ、日本は遅すぎる気がします。それはともかく、やはり学問分野での中国・韓国・日本の協力は非常に大きなメッセージになると思います。

蓮實　アジア的な知性の「ゴールデン・トライアングル」ですね。今日は本当にありがとうございました。

（二〇〇〇年一二月六日、懐徳館にて）

任期の4年間を何とか務めおおせるには、絶望的な状況に置かれても楽天的な表情を装い続けるほかはない。秘書掛長の関谷孝さんは、たちどころにその戦略を理解し、いっときも笑顔をたやさず私によりそい、掛を掌握して下さいました。当初は戸惑いぎみだった秘書の飯田めぐみさんも、やがては率先して楽天主義に加担して下さいました。かくして、関谷さんは4年、飯田さんは3年もの間、総長室に虚構の明るさを行き渡らせてくれたのです。お二人のそんな無謀な努力には、ただ感謝あるのみ。（蓮實重彦）